

令和7年2月28日

中標津町議会議長 後 藤 一 男 様

中標津町議会議員 阿 部 沙 希

研 修 報 告 書

以下の視察（研修）について、次のとおり報告します。

- 1 視察名 文教厚生常任委員会道内視察
- 2 視察先 帯広市 帯広第一病院
- 3 視察日 令和7年1月27日（月）
- 4 視察事項 P N S看護方式について
- 5 成果（具体的に）

P N S看護方式（パートナーシップナーシングシステム）は福井大学消化器内科の看護師長が最初に作ったことが始まりで、帯広第一病院は当時の看護部長などが出向いて視察に行き取り入れたことで、この制度の稼働が2018年に始まりました。

当初は上手くいっていましたが、令和6年6月以降に離職者が増えてこの体制は崩れ始めたとのことでした。（現在は5階の終末期病棟のみでP N S方式が行われています）

年間30%離職する離職者が増えた原因は診療報酬改定により、中規模病院7対1から10対1の看護体制になり、看護人員の不足が補えなくなり、苦しくなったそうです。

新人看護師の奨学金争奪戦が起こっており、月額の高いところへ人員が流れ、また手取りの収入が高い派遣や札幌市方面にも人員が流れているとのことでした。

この制度は新人看護師を取り残さない、チーム医療をする上で似てない人とペアを組むことで仕事の効率を上げたり、人間関係の構築の面ではとても職場環境の良いシステムです。

しかし、現在は看護師不足となっている看護方式を当町に取り入れて取り組むには課題が見えました。新人看護師が長く勤められて、切れ目のないサポートができる部分では十分な結果が得られると思いますが、夜勤体制はP N Sにはならない点、新卒・中途採用で人が入って来る時は良いが、大量に人が辞めたら難しい点、当町は公立病院である点から見ても、P N S方式を取り入れるには非常に課題が多いものと感じました。

現在は5階病棟だけがP N S方式を実施している関係で、実際の様子を見せていただいた際、院内看板で5階には「障害者病棟」というのがあったので、希望してみると5階

病棟のつながりから見学させていただきました。

この病院の5階フロアの半分で障害者の短期入所や家族のレスパイト目的の利用が実現されており、また寝たきりで医療的ケアが必要な重度の障害者も入院されていました。率先して聞いてみたことで、現場を見ることができた点では情報収集につながりました。



現場での説明

4 視察事項 帯広市教育委員会 ひろびろチョイス

5 成果（具体的に）

帯広市教育支援センターひろびろについて、不登校への取り組みを視察しました。

一人一台当たる学校の端末を利用し、デジタルソフト使用・開設費用が60万円であること、人件費と活動委託費用が合わせて500万円ほどであることをどう捉えるか次第ですが、当町へ活かすことへの期待は持てる内容でした。

実際の場所に行って端末を見てみると、ゲームのようなバーチャルな世界の中に、一人一人の子供たちのアイコンがあって、多様な時代に合わせた取り組みの一つであると感じました。「社会と人とのつながりの場所」「切り離されない、一人で孤立しないための場所」「学校復帰のためではなく、あくまで誰かとつながる時間や場所」「選択肢の中から引き出してあげる場所」ずっといるべきところではなく、あくまでも一時的に学校へ行けなくなった子供たちに、誰かや何かとつながる、一人にならない孤立化しないためのつながりの場所としては、当町にも取り組みの選択は有効であると感じました。

バーチャルの中でもつながりが生まれて、会話や挨拶ができることになったり、自分の居場所を見つけることができる点や、言葉だけがコミュニケーションのツールではない点で、子供たちの自殺やいじめを減らす観点からも、そういう居場所や環境があっても良いと考えます。



実際のメタパースの説明

地域全体で連携し学びを応援するという姿勢が大切であり、子供たちには様々な選択肢の中から自分で考えて答えを出すことや社会的自立へ向かう環境が必要です。

オンラインから抜けた現実世界でチョイスすることもでき、月に1回程度の課外学習への参加や取り組みの中には遠足やクラブ活動や職場体験（ファストフード店）などへの引

き出しもあり、そういう活動が学校復帰や社会的な自立へつながっていく事例を作っていました。

課題として見えたのは、この空間に入室さえすれば、退室するまでは実際に操作せずに寝ていたり漫画を読んでも良く、つながっただけの子供も一定存在することです。

できるを増やす、自信を持つこと、スモールステップで子供たちの不登校と向き合う面では、それなりに活動する居場所としては機能は可能であると感じました。

- 2 視察先 美幌町役場
- 3 視察日 令和7年1月28日（火）
- 4 視察事項 申込バス「もーびー」
- 5 成果（具体的に）

美幌町役場ではデマンド型公共交通について、実際のバスには乗れませんでしたでしたが、システムについて学んできました。

話を聞いていると美幌町民や美幌町役場で働く方々が、まず生き生きとしていて、お金をかけてでも住民サービスをやっていくをモットーにし、町と住民の協力・連携を感じました。

循環バスに町で年間いくら出してるかを町民へ明確に伝えて情報を共有し、交通空白時をまずなくしましょうから始まったそうです。路線バスでは対応出来ない細かい対応、乗車率が低い時間帯に運行しましょうという発想につながり、従来からのバス運行も守りながら高齢者の利用を守ることになっています。

路線バスは主に学生利用にまとを絞り、福祉施策加味で老人の移動を支えることを目的に、まずは先行の網走市へ行って試乗し、申込バス「もーびー」と車体に大きく強調周知することで大きなトラブルなく始められたとのこと。

デマンド型乗合タクシーにしたことで乗車率や乗合率を上げる課題と、タクシー会社に委託した部分では運転手確保の対策などがあります。採用時に何らかの支援をオプションし、二種免許を取得する場合は半分以上を町が補助金を出す、本州から町への面接経費や旅費を援助、地域おこし協力隊制度の活用でバスの乗務員を採用しバス事業所へ就職することへつなげるなどの取り組みがありました。

一台の車両で担うことや運行経費と運賃収入のつり合いバランスを見ると、積極的な



美幌町役場前

導入には当町の住民がどれくらい利用していくのかなどの課題があると感じました。

当町との大きく明らかな違いが一つ垣間見え、担当職員の二人がフットワーク良く、住民と常に話し合ってコミュニケーション対応をしているように感じました。町民目線に立って実際のバスに乗って利用してみる、地域の人とよく話し合うことで信頼を得て、もーびーについて取り組み活用することをボランティアなどの町民協力を結ぶ結果を出していました。

パフォーマンスよりも老人の移動を支えていく未来へつながる取り組みに、当町がどれだけ投資し向き合えるのかが一番の課題なのではないかと感じました。

2 視察先 網走市

3 視察日 令和7年1月29日（水）

4 視察事項 網走市立郷土博物館・モヨロ貝塚館

5 成果（具体的に）

○網走市立郷土博物館

アイヌ文化やオホーツク文化に触れました。生き物の剥製から生態を学び、土器の変化や人々の暮らしの変化など、時代の風景を知ることができました。

建物が昭和11年開館で北海道最古の博物館ということだけあって、キシキシと床が鳴る音や建物のゆがみから、深い歴史を感じることができました。

中標津町の郷土館の建て替えに当たっては、モヨロ貝塚館の方で違いを学びました。



郷土博物館内

○モヨロ貝塚館

リニューアルから11年目、モヨロ貝塚館は体験型の取り組みや再現コーナーを多く取り入れて、訪れる人への関心度を高めていました。

近代的な造り、大規模施設であるため、当町にどう取り入れるのか、現実問題では郷土資料館の建て替えとモヨロ貝塚館とでは規模が異なるため、どのようなことを盛り込んで建て替えをするのかを学びました。

オホーツク文化は動物を大切に祀り、祈りを捧げる展示の仕方など訪れる人の目をひくような見せ方に工夫を感じました。

人類の生命を感じさせる展示や説明で、火葬と土葬の違いを知ったり、人間は必ず骨になる生き物であることを多くの人々に知らせる、人間の生死にまつわることも伝えられる展示と体験と再現を、とても上手く融合した建物でした。